

Vol.12

韓国



東嶋和子の Energy満タン! 世界紀行



Vol.12

韓国

東嶋和子

Wako Tojima

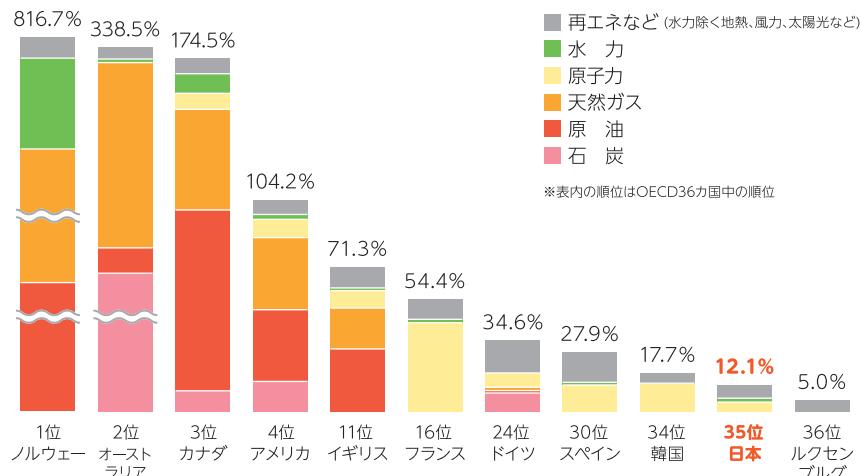
科学ジャーナリスト・青山学院大学非常勤講師

ご近所でも、国と国でも、「お隣さん」との関係はややこしいものです。時に親しく、時にいがみ合う、密な間柄といえるでしょう。だからこそお互いをよく知りたいと思います。

私はここ30余年で何度もお隣さんへ出かけました。最初はフェリーで船酔いの末、釜山へ。露店でタコの踊り食いをしたのが、韓国の「食」との強烈な出会いです。北朝鮮との国境にある板門店では、撮影したフィルムをカメラから抜き取られ、緊張が走りました。1953年に朝鮮戦争の休戦協定が調印された軍事停戦委員会の本会場では、銃を持つ南北の兵士が現在も警備にあたっています。

1988年のソウルオリンピックを境に、韓国の経済成長は本格化します。映画やテレビ番組を通じて「韓流」が大ブレイクし、日本人観光客が増えました。私も「冬のソナタ」や「オールイン」ゆかりの地であるソウル近郊、世界自然遺産の濟州島などを巡りました。主人公が宮廷料理人、後に女医として活躍する「宮廷女官チャングムの誓い」では、劇中の料理に魅せられました。韓定食、焼肉、全州ビビンバ、サムゲタン(参鶏湯)……、美味を求めて全土を食べ歩いたものです。

足を運んでみると、日本との共通点がたくさん見つかる韓国。エネルギーに関する限りでも両国は似ています。2019年のエネルギー自給率は17.7%。OECD36か国(2019年当時)中、韓国34位、日本35位(12.1%)と、ともに最下位クラスに甘んじています。韓国のエネルギー自給率の多くは、原子力発電によるものです。1978年に南部の慶尚南道で古里1号機が運転を始めて以来、2021年までに24基が稼働しています。日本と異なるのは、国有の韓国電



主要国の一次エネルギー自給率比較(2019年)

(出典) IEA「World Energy Balances 2020」の2019年推計値、日本のみ資源エネルギー庁「総合エネルギー統計」の2019年度確報値

裏面に続く →



力の子会社である韓国水力・原子力発電会社が原子力発電所の建設と運転を担っている点。原子力関連設備を製造する斗山重工業、コンサルタントの韓国電力技術会社、原子燃料を製造する韓国原子燃料会社などと国が一体となって原子力開発を進めているのです。国産化率は95%以上で、輸出にも力を入れてきました。

2009年にはアラブ首長国連邦(UAE)から4基を受注しました。実はこの案件、日米企業連合やフランスと激しい受注競争が繰り広げられたことで話題になりました。当時の李明博大統領が産業界と手を携えてトップセールスを行ったのです。その結果、韓国製のAPR-1400が輸出されることとなりました。

しかし、2011年の福島第一原子力発電所事故後、原子力反対の声が高まります。2012年には、複数の発電所で検査結果を偽った部品を使っていたことが明るみに出たことも、国民の不信を強めました。直近の文在寅前大統領は、脱原子力政策を掲げてきました。

2022年5月に発足した尹錫悦政権は脱原子力政策を撤回し、再び原子力推進に転換しました。読売新聞(2022年6月27日付)によると、尹氏は6月22日、原子力関連企業を視察し、「5年間ばかなことをしなければ、今、競争相手はいなかった」と、前政権を批判したそうです。停滞した原子力産業を再び成長軌道に乗せる、とも語りました。

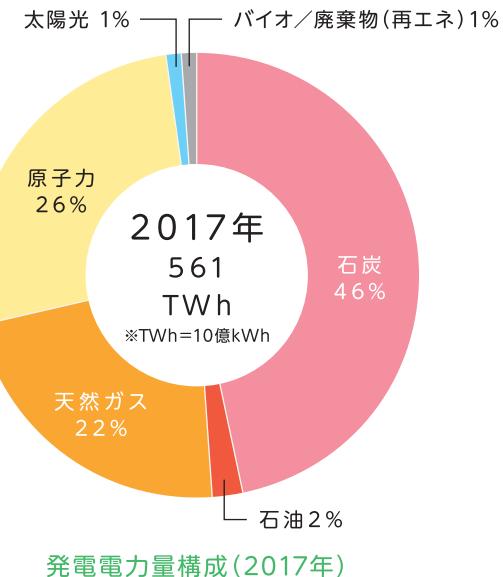
原子力産業新聞(2022年7月6日付)によると、韓国の新たなエネルギー政策の柱は、①地球温暖化への対応、②エネルギー安定供給、③エネルギー関連の新産業創出による堅固なエネルギーシステムの実現。具体的には、総発電量における原子力の割合を2030年に少なくとも30%とする方針や白紙撤回された原子力発電所の計画再開、革新的なエネルギー技術を持つベンチャー企業の育成などが示されています。また、2030年までに10基の原子炉を輸出するとともに、小型モジュール炉(SMR)開発に4000億ウォン(約414億円)を投じる、ともしています。

日本のように資源の乏しい国は、エネルギー関連産業の創出によって「創エネルギー」をするしかない、と私は口を酸っぱくして唱えてきました。新政権のもと、韓国はその方向へ大きく舵を切りました。日本が、その後塵を拂すことにならなければいいのですが。

(2022年10月)

●資料出典

『世界の原子力発電開発の動向 2021』日本原子力産業協会編集発行
 『平成30年度国際エネルギー情勢調査(諸外国のエネルギー政策動向及び国際エネルギー統計等調査事業)
 諸外国のエネルギー政策動向に関する調査報告書—経済産業省資源エネルギー庁委託調査』日本エネルギー経済研究所
 『みんなの知らない世界の原子力』海外電力調査会編著、日本電気協会新聞部発行
 『暮らしの中のエネルギー2022』「フォーラム・エネルギーを考える」事務局編



〈出所〉World Energy Balances 2018 extended edition database, IEA

PROFILE

東嶋和子 とうじまわこ / 科学ジャーナリスト・青山学院大学非常勤講師

筑波大学卒。在学中、米国カンザス大学に文部省交換留学。読売新聞社科学部記者を経て独立。「いのち」をキーワードに科学と社会の関わりを追っている。主な著書に『水も過ぎれば毒になる 新・養生訓』『人体再生に挑む』『放射線利用の基礎知識』『死因事典』など。外務省外交フォーラム外務大臣賞、原子力学会社会・環境部会優秀活動賞受賞

